

## ミャンマー医療事情

### (3) 医療施設と疾患について

LEO-Medicare 日本人診療所  
院長 伊藤 哲

前回までの **A) 渡航前の準備**、**B) 生活環境**に続き、今回は医療施設と当地でかかりやすい疾患についてお話しします。

#### C) 医療施設

##### 1) 全般

ヤンゴンやマンダレー、ネピドーなどの限られた都市以外の病院設備は極めて低水準です。ヤンゴンでは医院、クリニックは多数あります。施設によっては検査、薬品などの正確性や安全性について懸念があります（懸念だけかもしれませんが）が、針や注射用シリンジは使い捨てのものになっているそうです。

診断や治療のレベルは残念ながら高いとは言えず、根拠のない診断がされていたり、必要のない薬が多量に処方されていたりすることがままあります。

先にも書きましたが、脳出血や脳梗塞、心臓、循環器に関する急性疾患（心筋梗塞や動脈かい離など）の発症には、ミャンマーの医療はほぼ無力です。糖尿病や高血圧など、それらの危険因子となるような慢性疾患のコントロールには十分注意ください。施設によって利用可能な医療設備は大きく異なっています。たとえ日本で一般的なものであっても、ミャンマーでは全くできないものもありますので（胃の透視など）、検査を希望する場合には、事前の情報収集を欠かさないようにしてください。

##### 2) 公立病院

外国人であっても安価に受診することが可能で、その土地で（例えばヤンゴンならばヤンゴン総合病院）最も先進的な医療を期待できますが、施設内の全般的な衛生環境は不良です。土埃が舞い、患者とその家族でごった返しているのが普通です。

##### 3) 私立病院

ヤンゴンにはいくつかの私立病院があります。入院施設を有し、CT や MRI あるいは検査室なども所有し、24 時間救急患者の受け入れも行っているところもあります。しかしながら、常勤医師は少数で、専門医と言われる大学病院の著明な医師などが、非常勤勤務として定期的に診療を行うことが普通です。緊急に手術が必要な場合でも、外科医を呼んで執刀してもらうことになります。

公立病院に比べ診療費用は高価になりますが、環境は一般的に良好（まだまし、というレベルの場合もありますが）です。

##### 4) 交通事故の時

交通事故に際しては、診療に際して法律上の制約があり、注意が必要です。

初期治療は私立病院でも可能ですが、特に警察が関与した場合、公立病院を受診する

必要があります。警察の指示に従わず他の病院を受診しようとしても、原則診療は拒否されます。また、非常に重症な場合は、初期治療であっても常勤医師がいないことを理由に、受け入れを拒否されることもあります。外国人にとっては非合理的ですが、ミャンマー人同士の事故ケースなどを考えると、やむを得ない処置なのかもしれません。

#### 5) 出産および新生児、乳幼児

当地で出産を経験された方もいらっしゃいますし、ミャンマー人口が増加していることから、こちらで出産することは可能です。しかしながら、経過中にいったん何か問題が発生してしまうと、それからではミャンマー国外に移動するにも困難が予想されますし、たとえば輸血が必要となった場合でも、この国での輸血はタイ、シンガポールなどに比べ、安全性は劣ります。また出産後も当地での新生児死亡率は26/1000人、乳児死亡率は40/1000人（日本ではそれぞれ1/1000人、2/1000人、すべて2013年のデータ）といずれも高率です。そのような環境の中で出産するのだということをよく理解したうえで御決定ください。尚、妊娠中の定期検診は、ミャンマーでは受けられません。また、新生児、乳幼児の検診も極めて限られています。

乳幼児の治療についても、入院治療が可能な施設は限られていますし、その診療内容も不十分と言わざるを得ません。一般的な診療はもちろん可能なのですが、重症化してからの国外搬送は困難ですので、早めの受診と対応を心がけるようにしていただきたいと思います。

### D) 当地でかかりやすい疾患について

#### 1) 感染症

##### a) 蚊が媒体となるもの

デング熱、マラリアなどが蚊に刺されることによって感染します。マラリアはヤンゴン市内ではほとんど発生していないようですが、都市部以外での居住・就労時には注意が必要です。長袖・長ズボンの着用などの物理的な防御とともに、忌避剤を用いることをお勧めします。尚忌避剤としては、主成分であるDEET濃度の高いものがお勧めです。

##### b) 消化器感染症

腸チフス、パラチフスをはじめとした細菌性のものや、アメーバ感染症は、ミャンマーではごくありふれた疾患です。一般的な衛生環境が悪いため、どんなに注意していても感染してしまう可能性はあるようです。単に下痢だけでなく、発熱を伴ったり、血液が混じるような場合には、病院を受診されることをお勧めします。

##### c) インフルエンザ感染症

ほぼ通年、感染する可能性があります。検査キットはごく限られた施設にしかなく、また、いわゆるインフルエンザ治療薬の入手は困難です。インフルエンザ治療薬の一つである“タミフル”は、全世界での使用量の75%を日本が占めているとされているように、ミャンマーでもインフルエンザは“風邪の一種のウイルス感染症”との認識で、特段の費用のかかる診断や治療を必要とするものとは考えられてきていないようです。

## 2) 皮膚疾患

これまで受診していただいた患者様の傾向からは、皮膚に関係する疾患も多いようで、高温多湿、多汗、衛生環境の不良などが影響している可能性があるかと思えます。原因を特定して取り除くことはなかなか難しいですが、皮膚の清潔を保つように心がけていただきたいと思います。

## 3) 心理的な不調

ミャンマーでは、気分転換の材料となるような娯楽は乏しいように思えます。このため、精神的なストレスも蓄積されがちです。仕事上においても、日本と現地従業員との慣習の違いから、些細なことであってもストレスを感じる場合もありますし、これを背景に、日本人同士さらには本国との軋轢を生じることもあるようです。

なかなか精神的なストレスの解消を図ることは難しいとは思いますが、一般的な解決方法というものも、どこか他人事、絵空事のように思えます。とはいえ、運動や食事、旅行など、個人のし好に合った解決方法があると思われれますので、自分にあった精神的ストレス解消方法を見つけていただきたいと思います。

## E) 最後に

海外邦人医療基金のヤンゴン巡回医療時のアンケートでは、2015年、2016年ともに緊急時の医療について、最も不安を感じていらっしゃるようです。

**2015年度 不安要素の上位4位**

- 1 緊急時の医療 32%
- 2 医師とのコミュニケーション 15%
- 3 身近に相談できる医師がいない 15%
- 4 定期的な健康診断 15%

**2016年 不安要素の上位4位**

- 1 緊急時の医療 (39%)
- 2 医師とのコミュニケーション (14%)
- 3 医療システム・制度がわからない (10%)
- 4 定期的な健康診断 (10%)

実際緊急時の医療体制は整っておらず、それを如実に表す結果であると思われれます。特に循環器や脳血管疾患など、緊急対応を必須とする疾患の場合、病院へのアクセス、搬送先病院の設備及び専門医の存在の有無の問題などで、時期を逸してしまう可能性が高いと思われれます。国外搬送を行う場合にも、それに要する時間を考慮すると、有効な治療が行われる可能性は低くなってしまっているのが現実です。

これらの疾患を発症しないよう、高血圧や糖尿病など、これらの疾患のリスクを高める病気については、十分なコントロールを心がけてください。

第2位、3位の事項につきましては我々の施設がわずかではあってもお力になれると考えております。

医療制度等に関わらず、不明な点がございましたら、遠慮なくお問い合わせください。

ミャンマーに関する信頼できる情報源として、下記の関西福祉大学 勝田教授のサイトをご紹介します。

**ミャンマーよもやま情報局**

<http://www.myanmarinfo.jp/>

ミャンマーでは、感染症にかかりやすく、生活習慣病についても悪化を招きがちです。また、気分転換を図れる娯楽も乏しいのが実情です。しかし、そのような環境にもかかわらず、医療レベルは高くありませんので、自分の身は自分で守る意識が必要です。どこまでのリスクが許容できるのか、人によってそのレベルは様々ですし、その時々によっても、受け入れなければならないリスクも変化するものと思います。情報収集と準備はしっかりとして、刹那での人の意見に惑わされることのないようにしていただければ、ミャンマーライフをお楽しみいただけるものと思います。

**【編集部より】**

以上で3回にわたってお届けしたミャンマー医療事情を終わります。

LEO-Medicare 日本人診療所は、ヤンゴン市ビクトリア病院内に開設された日本人医師および看護師常駐の診療所です。下記 URL もご参照ください。

<http://www.daiyukai.or.jp/myanmar/>